「めだか大学通信」４号

２０１２．５．６

笠木さんとの打ち合わせが終わり、後は６月３０日に向かって私たちの準備を進めていくだけです。寺子屋の「つくり小屋」は、この「笠木透講師による詞の連続講座」を引き継いで生まれたものではありますが、この機会にこれからのためにも、これまでの経過と問題をまとめておきたいと思います。読んでおいていただきたいし、意見を寄せてくださるとうれしいです。　　岡田京子

まとめ・その１　「ここに至るまで」

●４０年前、笠木さんたちは、中津川の山の中に残っていた芝居小屋で、新盛座コンサートというのをやられていました。私や安達さんが笠木さんと出会った頃です。

初めて行ったこのコンサートはほぼ徹夜で、１５０人くらいも入っていたでしょうか。

私が驚いたのは、客席にいる人たちの多くが、ただのお客ではなく、順番に舞台に上がって歌ったり踊ったり…そしてまた客席に座るという人たちだったことです。プロの人たちではないと思われるのに、みんな自分たちで作った歌を持っていたのです。笠木さんのグループ「我夢土下座」もその時、『我が大地の歌』『私の子どもたちへ』『小さな町』を始めとする今に伝わる名曲の数々を歌われて、私はそのすばらしさに呆然とするばかりでした。創造活動をプロやマスコミが独占して、大多数の人たちをそれと全く無縁なものにしてしまっている実状の不健康さをうすうす感じていたのでした。「こんなことが出来るんだ」という驚きの中で、私や安達の生き方は変わっていったのです。遠い昔、音楽に願っていた道だったことにも気づいていきました。

●でも東京で、これをやることにはたくさんの問題がありました。折からの高度経済成長で、消費文化のまっただ中にあり、価値観の多様化は人々をばらばらにして、苦心して自分たちの歌を創る必要も欲求も、どこにもないかに見えました。もちろんこれは東京だけの問題ではなかったからこそ、笠木さんたちの運動が始まったのでしたが…。この必要性を共有して行くことの難しさは、今も変わっていません。

それにほとんどの人たちが、今もそうですが「曲をつくる」ということを自分とは無縁のものと思っていました。音楽の中でも「作曲」とは難しいもの、たくさん勉強してから出来るものと考えられているのが今も常識であることに間違いありません。でもほ

んとうにそうなのでしょうか。プロを目指す人ならともかく、普通に暮らしている大多数の人たちにとってもそうなのでしょうか。あの美しいロシア民謡や数々の朝鮮・韓国の歌を始めとする、各国の民族音楽はどうやって出来ていったのでしょうか。

●ある衝動やきっかけがあって「作曲をやりたい」と思った時に考えることは、普通、学校に入るか、その道の先生につくかで、そして型どおりの「和声学」「対位法」等のレッスンから始まる果てしない勉強があります。それは、「ピアノを弾きたい」と思った子どもが先生について、ドイツの子どもの教則本であるバイエルから始めて、その軌道を進んでいくのと同じです。それに忠実であればあるほど、なかなか日本人としての自分の世界には行き着かない仕組みになっています。

いってみればプロを目指す音楽教育しかないような日本といってもいいくらいです。クラシックだけでなく、どの分野の音楽教育も似たり寄ったりではないでしょうか。現代は大分違っては来たといいますが、それでもテキストで日本に根ざすものは、今もってほとんど皆無に近いのではないかと思います。そしてたいていは「音楽をやめる」ということでこの矛盾をくぐり抜けていくのかもしれません。

●私も、たいして勉強もしないうちにこの矛盾に取りつかれました。私が救われたのは、比較音楽学の小泉文夫氏のおかげです。その頃所属していた「日本音楽・舞踊会議」に会員としておられた小泉氏は、世界的視野に立って、エネルギッシュに伝統と現代の問題を探り出し、当時のたくさんの人たちに影響を与えておられました。その著書『日本伝統音楽の研究』を読み、講演を聴き、仲間で自宅にお邪魔して親しく話を伺ったりすることで、自分を含めての今の日本の音楽の置かれている状態と問題点を、歴史的にも、語法的にも理解して行くことが出来たのです。

●小泉氏には「空想音楽大学」という計画がありました。もちろん空想ではあるのですが、音楽家は夕方から頭が冴えるので夜開く大学とか、テストは生徒が先生に対してするとか、クラシックと歌謡曲を一緒に学ぶとか、楽しいプランがいっぱいだったようでした。これももちろんプロのためなので、プロにはプロの役割があるのですからこれは肯定するとして、私はこの大学の庶民版を作ろうと思いました。そうして出来たのが「めだか大学」です。一期生の募集の時、入学資格を「音痴でなければならない」としました。音楽教育をあまり受けていない人が良い、と思ったからです。（これは後に大変重要な意味を持っていることがわかってきました）みんな威張って入ってきてくれたのはうれしかったです。

●とりあえず、小泉理論を中心に据えて、「なぜ日本は音痴と思う人が多いのか」ということを話して行きました。そして笠木さんや各地の人々の歌や動き（フィールドフォ

ークムーブメントと呼ばれていた)を伝え、一緒に歌ったり、時にはそういうコンサートを聴きに地方まで出かけたりもしました。その後旅の仕事が増えていきましたが、おおむね同じやり方で、「音楽は外にあるのではなく、日本語を使って生きている自分の中から掘り出すもの」ということを、わかってもらいたいと思ってきました。

●そんなある日、コンサートで出会った笠木さんに、こんな話をしたのです。「普通の人たちが創っていく時の法則（よりどころ）の一つとして伝えたいのが、日本の音階、しかも今日に生きている民踊音階と思います」といった時、笠木さんはこのように明快に答えられたのです。

「僕や田口が（我夢土下座の田口正和さん、『わが大地の歌』等の作曲者）歌を作り初めた時、最初に据えたのは民族的なものでありたいということだった。と言っても理論をわかっとるわけではなかったから『わが大地の歌』にしても感覚的に作っとったわけです。(『わが大地』は民踊音階の五つの音で出来ている）でも感覚だけでは文化にならんのです。道具としての理論がほしい。もともと民族音楽から生まれた理論であれば、専門家が民衆の手に返して行かなければならないのではと思っていたが、今までは何もなかった。今、岡田さんや安達さんの手で民衆に返してもらう、手渡してもらうことに僕は大賛成です。協力します」と。それに勇気をもらってからまた何年かがたちました。「創る」ということはある持続がいること、単発では深まりにくいことを感じていたのですが、プロでもアマでもない人たちにとって「持続してつくる」というきっかけを作ることは難しいことでした。

●２００６年、東京で「めだか大学属寺子屋」というものを主宰することになりました。これは歌や音楽が主体ではなく「この時代をどう見るのか」「自分たちはどのように生きるのか」を身近な人たちと共有したくて開いたものでした。

笠木透・安達元彦・現代座の木村快という現代かなり度はずれた3氏を講師として６年続けましたが、その最後に笠木さんに「連続作詞講座」をお願いしたことから、必然のように作曲講座が生まれ、図らずも私は初めて定期的に「創る」ということを続けることが出来るようになったのが今の形です。

●そして「つくり小屋」だけでなく、前から同じ体験をしてきた「にんじん畑」「すみれ分教場」と、進め方や方向を同じにしていくことになりました。それと、「寺子屋」から生まれた「うた小屋」を、この３つのグループの作品を歌い、広げていく場としてこの四つを新しい「めだか大学」としたのはご存じの通りです。

こういう形をとりつつ一年半がたちましたが、今「持続すること」のもたらすものの大きさをまのあたりにして驚いているところです。

◎次号は「私たちにとって理論とは」というレポートにするつもりです。

各グループの経過

「つくり小屋」４月１日

●　小池久美子さん　　メンバーの中では一番最後にスタートした小池さんは、孫に歌っていた子守唄で自分の世界を探り当てたように思います。その節（音）を自分に確かめるために、『ふるさとで私の春が始まる』を同じ節で歌ってみるように勧めましたが、これはとても効力を発揮して、この後ほんとうに自分のものといえる節で作ったのが『お父さんに』です。２５年前に亡くなったご主人に向かって、いつも話しかけていたという言葉のひとつにほんとうに素直に曲がつき、みんなで歌いました。泣きながら歌った人も多かったのです。この後ご主人のお墓に一人で行って、これまでの３曲をお墓の前で歌ったという小池さんです。良かったね！

●　細田伸昭さん　これまでの作品で、「閉じられた世界」の一つである都立高校の実態を私たちに教えてくれた細田さんが、だんだん自分の身近なことに目を向けてこられたようで、今回は亡き弟さんを偲ぶ詞『桜の季節に』でした。みんなとても楽しみな様子でした。

●その後、３号のニュースの「わけのわからないもの（心）が自分にとって一番謎で、しかし一番自分らしいものを秘めている」という司修氏（画家）の言葉についてみんなでいろいろおしゃべりをしました。楽しい時間でした。

「つくり小屋補講」４月２６日

●今井治江さん　石原都知事の発言に憤慨した今井さんが「なんてひどい発言でしょう」と言ったとき、李和蓮さんに「でもあなたたち日本人が選んだ知事なんでしょう」と言われてショックを受けた彼女が、関東大震災の朝鮮人虐殺をテーマにして作品を作ろうと思い立ち、みやけさん･山本さんはじめみんなの協力を得ながら、悩み抜いて半年以上かかった『あなたと共に』が出来ました。斉藤･みやけ・山田さんと私で歌ってみました。

「あなたが背負った歴史から、私が背負った歴史が見えた…」で始まる素直な歌に感動しました。『ハムケ』を送ってくれた和蓮さんに対する返歌ともいえる作品が出来たこと、すごくうれしかったです。５月の「つくり小屋」でみんなで歌いたいと思います。。

●みやけしゅうぎさん　今まで花や鳥やあのひと、ばかり書き続けてきた三宅さんが、とうとう棄てたはずのふるさと、女川･石巻のことを書き始めたことはうれしいことでした。待っていた詩でした。女川で生まれ育ち、石巻の高校教師、そして考古学の学者、また詩人として過ごしたそのふるさとで何があったのでしょうか。三宅さんは話したがらないのですが、私たちは知っていたいことであるように思います。それは、女川は福井同様、小さな田舎に原発が立ち、それによって生きてきた人たちがいるところです。

それに反対することは、多分村八分であったことでしょう。３．１１後「ふるさとは捨てたはずだったが、そういうわけには行かなくなった」と一言いわれたみやけさんでした。

　そういうみやけさんが、今回『大震災・大津波・原発』に寄せる詩を、何と二〇編も書いてこられて驚きました。待っていた詩です。みんなで読んでみたいと思います。

「すみれ分教場」４月２日

●笠木講座に参加してそのままになっていた船岡嘉彦さんの『母さんごめんなさい、そしてありがとう』が完成しました。メンバー４人がありったけの力を発揮してほめあげこき下ろし…そうして作り上げていくこのチームの力と人間関係は偉大です。都会に住む息子と、東北の田舎に住む母との心のやりとりが浮かび上がってきました。おめでとう！

●　中村由紀男さんは、この後の補講で、孫の可夢生くんの子守唄を作りました。焦点を可夢生くんに絞ることによって、由紀男さんの中に起こった変化は大きいものがあったと思います。「何かわけのわからぬもの」という言葉がほんとうにここに起こった、としかいいようのない事態です。ここに来るまで由紀男さんはとてもつらかったと思います。今後を見守りたいです。このうたを歌ったら可夢生くんはすぐ眠った、というメールが北海道から届きました。

●その後で、笠木コンサートに出る歌の練習をしました。歌い込む、ということがどんなに大事か、そして新しいものを発見できるチャンスでもあるということを信じていきたいものです。

「にんじん畑」４月２３日

●　久し振りに喜多村幸子さんが参加しました。新しい詩を持ってきました。まだ自分が小さかった頃、詩のようなものを作っていて、それをお母さんが書き留めておいてくれたものをもとにして作ったとのこと。どんな曲になるか楽しみです。

●　笠木講座から２年もかかって作った渡辺ミヨ子さんの『いろりの赤い火』の稽古をメンバーのリフレインを入れてしました。ミヨちゃんの淡々と歌う声は魅力的ではありますが、ちょっと冷たいのではないかと私が言ったりして…でもとても楽しい稽古でした。「にんじん畑」は少人数ですので、リフレインは他のグループも少し加わった方が良いかもしれません。

●　上原涼子さんの『ふるさとの川』も先月新しく出来た２番を入れて何度も歌いました。この歌のおかげで「日向灘」と言う言葉を含む上原さんのふるさとが近くなった気がします。何度も歌うということはなんて良いことかと改めて思います。

「うた小屋」４月２０日

前にも書きましたが、「うた小屋」の仕事は❶それぞれのグループで作ったものを歌っていくことと❷外に向かって少しずつ広げていく努力をすることでした。

❶は、ピアノの部屋が取れず、キーボードやアコデオンでちょっと不自由でしたが、集まった中村由紀男･京子、小池、稲川、みやけ、斉藤、小林、小関、細田、村上さんたちで、それぞれの歌の稽古をしました。

❷は、４月１５日、鈴木たか子さんの「日曜版」に中村由紀男さんと京子さん・稲川さんが。４月２９日の、たつの・安達さんの「表現する森の仲間たち」にみやけさんが出演した様子を稲川さんとみやけさんが書きました。

4月15日　　稲川　恵子

鈴木たか子さんの「日曜版」に出演してきましたので､報告します。

中村由紀男さん･京子さんも出ました。

まず由紀男さんの『音を知らない君への子守唄』。アカペラで可夢生くんをおんぶしているしぐさで、とっても優しく歌ってくれました。

初めて聴きましたが､これから何度も歌う度に、この歌に由紀男さん自身も癒やされていくのではないのかなと思いました。とても自然な感じが良かったです。

次に京子さんの『思い出す手』。たか子さんの素晴らしい伴奏の中、しっかりとした声で歌い上げていました。3番は、由紀男さん、村上さん、船岡さんも入って盛り上がり素晴らしい出来でした。

私は『やまなしの』と『海の貝』をやりました。

4年ぶりの日曜版です。(その間に博己さんがたか子さんのコーラスに助っ人で行ったりしたのですが)

一人10分と短いので、解説の小さなレジュメを前の日に書きました。木挽きで使ったおが（大鋸）の絵も描きました。

出来はグランドピアノがよく響いて「歌の声が消えてしまって残念！」とたか子さん他に言われました。伴奏と歌のバランスという演奏するときの問題でした。

博己さんも来て、録音してくれたので、家に帰ってから聴いて反省会でした。

確かに…。勉強になります。

実は博己さんにはこの2曲は初めて聴かせたのです。家ではヘッドホンしてやっているので。「ピアノは良かったよ」と言ってくれました。

日曜版はギターの方、歌の方、ピアノの方などいろんな音楽を聴くことが出来て楽しいで

す。11月11日に100回を迎え、一区切りにされるそうです。皆さんもどうぞ出てみてください。

４月２９日　　みやけしゅうぎ

練馬区勤労福祉会館で「表現する森の仲間たち」が開かれ、私も出演しました。私は[『ヒバリ』『鳥のあしあと』『はなみずき』の３曲を歌いました。『ヒバリ』は宮沢賢治の詩『春と修羅』の一節を作曲したもの。ほかの２曲は自分の作詞･作曲です。

歌う前の自己紹介で「前歴」を少し言い「自分で歌を作って歌うなんてことは、７７歳３ヶ月の人生の中で初めてです」と言った(と思う)ら、５０人ほどいた会場が急に賑やかになり、気が楽になりました。しかし歌の方はノドが腫れていて（やっと声が出て来たのにまた症状が出た)、声がよく出ませんでした。歌っている間、安達元彦先生のピアノの伴奏が美しく聞こえ、それで安心して歌えたように思います。

当日は山田三重子さんと稲川恵子さんも応援に来てくださり、稲川さんは懇談会にも出席して、めだか大学の話など交えて私をフォローしてくれました。

また、連弾、パーカッションとの合奏などいろいろな表現を試みていて、音楽を根っこのところで楽しんでいる風でした。安達元彦作曲『ＭＩＮ―ＹＯ』のピアノ演奏はもう一度聴きたいものです。ゲストの詩人星あかりさんが朗読した福島原発の詩も良かったと思います。次の第２３回「表現する森の仲間たち」は７月とのことです。